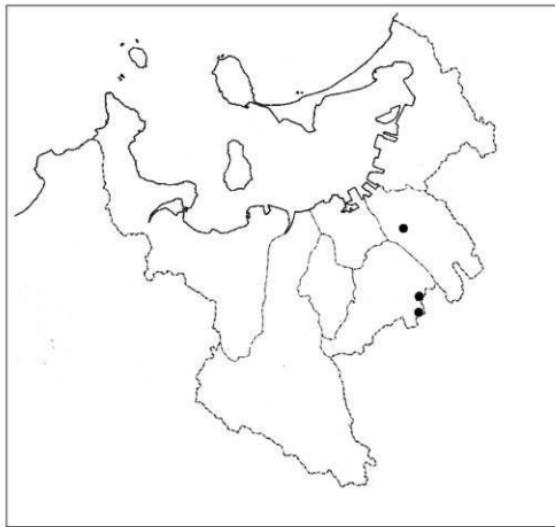




中南部 11

－寺島遺跡第3次・比恵遺跡群第86次・弥永原遺跡第10次調査の報告－



調査番号 調査略号

1. 寺島遺跡第3次調査	1101	TRS-3
2. 比恵遺跡群第86次調査	0324	HIE-86
3. 弥永原遺跡第10次調査	0727	YNB-10

2013

福岡市教育委員会





序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため、市内各所には、歴史的遺産が数多く残っています。本市は、これらを後世に残し伝え、市民の皆さんに活用していただくために、文化財の保護と活用に取り組んでいます。

福岡市では、こうした取り組みの一環として、開発にともないやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存につとめています。

本書は、平成15年度・平成19年度・平成23年度に発掘調査を実施した、寺島遺跡第3次調査、比恵遺跡群第86次調査、弥永原遺跡第10次調査の成果を報告するものです。本書が、市民の皆さまの文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者のみなさまをはじめとして、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心からの謝意を表します。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦



例言

1. 本書は、平成15年度・19年度・23年度に福岡市教育委員会が実施した、寺島遺跡第3次調査、比恵遺跡群第86次調査、弥永原遺跡第10次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書の作成は、国庫補助事業として実施した。
3. 発掘調査および整理報告書作成は、福岡市教育委員会文化財部（調査時点）の下記担当者が実施した（所属は本年度）。
寺島遺跡第3次調査：松尾奈緒子（経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課）
比恵遺跡群第86次調査：大堀紀宜（経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課）
弥永原遺跡第10次調査：加藤良彦（経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課）
4. 調査に関する項目、遺構・遺物の実測・製図者、写真撮影者、執筆者等は各章の最初に記載した。
5. 各章の執筆は調査担当者が行い、本書の編集は松尾が行った。
6. 本報告書にかかる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、保管・公開する予定である。



本文目次

第1章 寺島遺跡第3次調査の記録	1
1. はじめに	3
2. 遺跡の地理的・歴史的環境	3
3. 調査の記録	6
4. 小結	13
附論 寺島遺跡第3次調査出土ガラス小玉について（福岡市埋蔵文化財センター 西澤千絵原）	14
第2章 比恵遺跡群第86次調査の記録	19
1. はじめに	21
2. 調査の記録	22
3. 小結	25
第3章 弥永原遺跡第10次調査の記録	27
1. はじめに	29
2. 調査区の立地と環境	29
3. 調査の記録	32
4. 小結	36

挿図目次

【寺島遺跡第3次調査】

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S=1/2500)	4
Fig. 2 周辺調査地点 (S=1/2500)	4
Fig. 3 調査区位置図 (S=1/500)	5
Fig. 4 造構配置図 (S=1/150)	7
Fig. 5 トレンチ 1・6南壁土層断面図 (S=1/40)	8
Fig. 6 SD01出土遺物実測図 (S=1/3)	9
Fig. 7 トレンチ 3 北壁土層断面図・調査区東隅南壁土層断面図 (S=1/40)	10
Fig. 8 SD02・04出土遺物実測図 (S=1/3)	10
Fig. 9 SX12平面図・調査区北壁土層断面図 (S=1/50)・出土遺物実測図 (S=1/3)	11
Fig. 10 そのほかの出土遺物実測図 (S=1/1・1/3)	12
Fig. 11 昭和初期～大正末の地形図と寺島遺跡3次調査地点 (S=1/4000)	13
Fig. 12 SD01出土ガラス小玉顕微鏡写真	14

【比恵遺跡群第86次調査】

Fig. 1 調査地点位置図 (1/4000)	21
Fig. 2 調査区位置図 (1/400)	23
Fig. 3 調査区全体図 (1/100)	24
Fig. 4 出土遺物実測図 (1/3)	25



〔弥永原遺跡第10次調査〕

Fig. 1	周辺調査区位置図(1/4,000)	30
Fig. 2	調査区地形図(1/500)	31
Fig. 3	調査区位置図(1/125)	31
Fig. 4	造構全体図(1/100)	32
Fig. 5	南壁土層断面図(1/50)	32
Fig. 6	SD01・SD02上層出土遺物実測図(1/3)	33
Fig. 7	SD02下層出土遺物実測図(1/3)	35

図版目次

〔寺島遺跡第3次調査〕

図版 1	1 I区全景(南西から)	15
	2 II区全景(南から)	15
図版 2	1 トレンチ11(北西から)	16
	2 SX07(北西から)	16
	3 SD01 トレンチ1拡張区南壁土層堆積状況(東から)	16
図版 3	1 SD01 トレンチ1南壁土層(北から)	17
	2 SD01・SX17 トレンチ6東部南壁土層(南東から)	17
	3 SD01・SX18・SX12 トレンチ6南壁土層(北から)	17
図版 4	1 SD01・02 トレンチ3北壁土層(南東から)	18
	2 SD06 調査区東隅南壁土層(北西から)	18
	3 SX12 完掘状況(南東から)	18

〔比恵遺跡群第86次調査〕

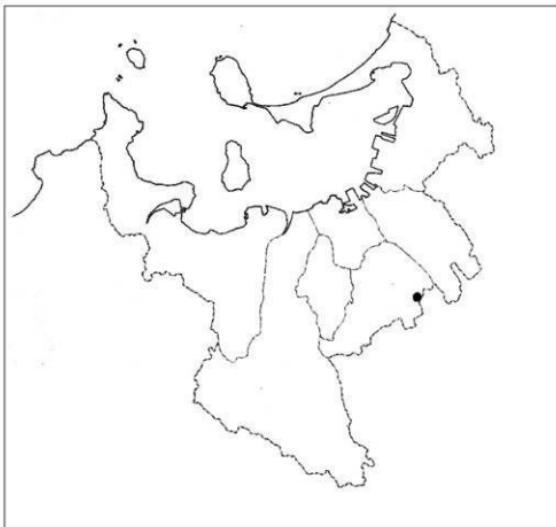
図版	1 調査区全景(南西から)	26
	2 調査区南半部(南西から)	26

〔弥永原遺跡群第10次調査〕

図版 1	1 調査区全景(北から)	37
	2 SD01・02・03(北から)	37
図版 2	3 南壁土層断面(北から)	38
	4 SD01鉤痕(西から)	38
	5 SD04(東から)	38
	6 SD05(西から)	38
	7 出土遺物	38



第1章 寺島遺跡第3次調査の記録



調査番号 1101

遺跡略号 TRS-3

例言

1. 本章は、福岡市南区横手南町における共同住宅建設事業に先立って、福岡市教育委員会（調査時点）が平成23年度に発掘調査を実施した、寺島遺跡第3次調査について報告するものである。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課（現 福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課）の松尾奈緒子が行った。
3. 方位はすべて磁北であり、真北より $6^{\circ}40'$ 西偏している。また、座標は、日本測地系（第II系）を用いている。
4. 遺構は、溝をSD、性格不明遺構をSXと略号化して、記述した。
5. 本書に掲載した遺構・遺物の実測・写真撮影・製図はすべて松尾が行った。
6. 貿易陶磁については以下の文献の分類を参考にした。
太宰府市教育委員会2000「太宰府条坊X V - 陶磁器分類編 -」太宰府市の文化財第49集
7. 附論として、福岡市埋蔵文化財センター 西澤千絵里（2012年9月現在）による、ガラス小玉に関する論考を掲載している。Fig.12の写真は西澤が撮影した。





1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

福岡市教育委員会文化財部（現福岡市経済観光文化局文化財部）は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成22年11月16日、共同住宅建設に先立ち、福岡市南区横手南町地内の埋蔵文化財の有無について、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に照会文書が提出された（事前審査番号22-2-804）。当該申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である寺島遺跡の隣接地内に位置していることから（分布地図番号25-0102・遺跡略号TRS）、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者の承諾を得て、平成22年12月6日に試掘調査を行い、地表下40cmの黄白色粘土上面で弥生時代から中世の遺構を検出した。これをうけて、埋蔵文化財第1課は、この旨を申請者に回答し、その取り扱いについて協議を行った。その結果、申請面積524.37m²のうち、共同住宅建設にともなう基礎工事によって遺構の破壊が免れない210m²について、平成23年度に発掘調査、平成24年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存をはることで合意した。

発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が、平成23年4月11日から同年5月9日まで実施した（調査番号1101）。調査面積は270m²および、検出された遺構から、弥生土器・土師器・輸入陶磁器等の土器類を中心にコンテナ4箱分の遺物が出土した。

(2) 調査の組織

調査を実施した平成23年度および整理報告を行った平成24年度の組織は以下の通りである。

現地での発掘調査にあたっては調査委託者をはじめとして、関係者のみなさま、地域のみなさまからご理解をいただきとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

調査主体：（平成23年度）福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

（平成24年度）福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

調査統括：（平成23年度）埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫

調査第1係長 米倉秀紀

（平成24年度）埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗

調査第1係長 常松幹雄

調査庶務：（平成23年度）埋蔵文化財第1課 管理係 井上幸江

（平成24年度）埋蔵文化財審査課 管理係 川村啓子

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係 木下博文（現 福岡市埋蔵文化財センター）

調査担当：埋蔵文化財第2課 調査第1係 松尾奈緒子（現 埋蔵文化財審査課事前審査係）

調査作業：石川洋子 岩本美恵子 上野照明 大庭智子 小野千佳 唐島栄子

草場恵子 桑野孝子 豊丸秀仁 中村圭子

整理作業：松下伊都子 宮崎由美子 渡邊宏代 （五十音順・敬称略）

なお、文化財部は、組織改編のため、平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

2. 遺跡の地理的・歴史的環境

福岡平野は、那珂川と御笠川をはじめとした中小河川によって形成された沖積低地と、そのなかに

1. 寺島遺跡
 2. 笠抜遺跡
 3. 横手遺跡
 4. 日佐遺跡
 5. 佐木原遺跡
 6. 三宅C遺跡
 7. 大根E遺跡
 8. 三宅B遺跡
 9. 野多目C遺跡
 10. 須玖遺跡群
 11. 木本遺跡群
 12. 綾前院遺跡
 13. 南八幡遺跡
 14. 麦野B遺跡
 15. 三筑遺跡
 16. 篠原遺跡
 17. 井尻A遺跡
 18. 井尻B遺跡
 19. 諏岡A遺跡
 20. 諏岡B遺跡
 21. 井尻A遺跡
 22. 五十川遺跡
 23. 麦野A遺跡
 24. 高畠遺跡
 25. 板付遺跡
 26. 那珂君休遺跡
 27. 那珂河遺跡群

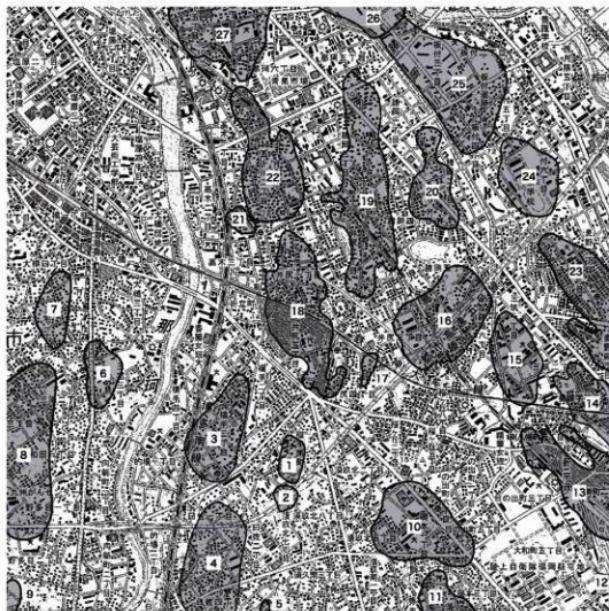


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

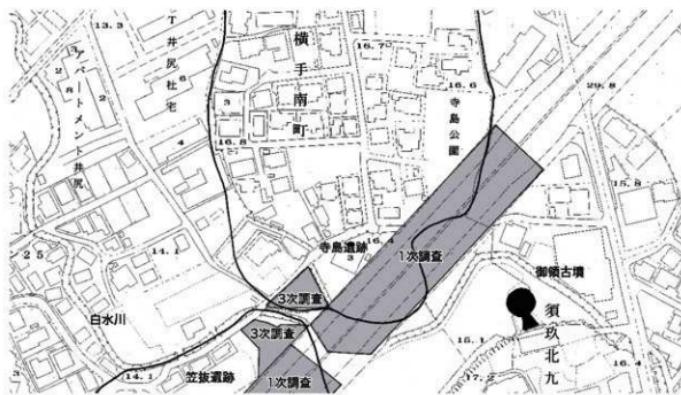


Fig. 2 周辺調査地点 (S=1/2500)



Fig. 3 調査区位置図(S=1/500)

点在する河川開析をうけた丘陵や段丘から構成される。寺島遺跡は、このような福岡平野の中央部に位置しており、那珂川中流域右岸に沿って南北方向にのびる丘陵上に立地する集落遺跡である。本報告以前に、寺島遺跡では2回の発掘調査が行われており、弥生時代中期後半・弥生時代終末期・古墳時代前期・古墳時代中期の各期の住居跡等や古代・中世の溝・土坑などの生活遺構が確認されている。

寺島遺跡の周辺には、南東側に展開する須玖遺跡群をはじめとして、弥生時代中期後半～後期にかけて最盛期を迎える大規模集落が集中している。遺跡北側の井戸B遺跡や南側の弥永原遺跡では、青銅器・ガラス製品生産関連遺物が出土し、弥永原遺跡では環濠や青銅器を副葬した墓域も確認されている。また、古代においても、大宰府と鴻臚館を結ぶ官道西門ルートが遺跡の東側をとおり、近傍には三宅庵寺や井尻庵寺等の古代寺院も存在することから、寺島遺跡周辺は古代において重要な地域であったことがわかる。

本調査地点は、寺島遺跡の集落が展開した丘陵部（1次調査）から約2m～3m低い丘陵裾部に位置している。調査区の西側を那珂川から分岐した白水川が北流しており、白水川を挟んで笠抜遺跡と隣り合う位置関係にある。笠抜遺跡では、旧白水川からの水を南西方向へ導く縄文時代晩期末や弥生時代中期後半の水路、および、旧白水川に設けられた弥生時代中期後半・古代～中世の井堰などが検出されている。また、1次調査では、旧白水川にもうけられた貯水遺構から、大量の弥生時代中期後半の土器とともに、鋸型土製品や鋼矛の中子等も出土しており、鋼鐵等の青銅製品の鋸型が出土した御陵遺跡との関連性が指摘されている。とくに、本調査地点と白水川を挟んで隣接する3次調査では、旧白水川に設けられた古代・中世・近世の井堰等が確認され、本調査地点では、旧白水川の北岸の検出と生産関連遺構の検出が予測された。



3. 調査の記録

(1) 調査の概要(Fig.4)

調査地点は調査当時、南東側の外環状202号線や南西側の市道大宰府大野城線の路面より1.8m～3m程度低い畠地であった。また、南側隣地は寺島遺跡の集落が展開する丘陵部となっており、調査地点は南側隣地より約3m低い状況であった。調査地点の地表面の標高は14.1mをはかる。試掘調査成果では、地表下40cmの耕作土直下で検出した黄白色粘土上面で、覆土に粗砂を含む溝状遺構が確認されていた。

発掘調査は、耕土を場内で処理する必要があったため、調査区の北東側をI区、南西側をII区として、調査区を半分に分けてすめるとした。試掘調査成果を踏まえて、遺構面を耕作土直下の黄白色粘土上面に設定し、2011年4月11日にI区の耕作土を重機で掘削する作業から着手した。I区の埋め戻しとII区の表土剥ぎは4月22日に行い、最後に、重機でトレーナーを掘削することによって、遺構面とした黄白色粘土よりも下層に遺構が存在しないことを確認したうえで、2011年5月9日に調査を終了した。

遺構面の標高は、I区・II区ともに13.8mをはかり、平坦で、笠抜遺跡3次調査の遺構面とほぼ同一である。遺構面とした黄白色粘土は、灰色粘土粒を含むもので、八女粘土の再堆積層とされているものである。黄白色粘土の層厚は約40cm程度とうすく、標高13.4m前後からは層厚2.5m程度の暗青灰色シルトとなる。

検出した遺構には、近世～近代の耕作痕跡SD08・SD09・SX03・SX11、中世前半期の溝SD01および水口、弥生時代中期後半～後期の性格不明遺構SX12などがある。SD01は、12世紀代に埋没を開始した、II区南西からI区北へ調査区全体を縱断する水路で、水路に対してほぼ直行する水口が3箇所とりついている(SX07・トレーナー拡張区・SX13)。また、I区では、調査区東端、すなわち、寺島遺跡の丘陵部に沿うようにして水路SD02・SD04・SD06が、SD01の埋没後に掘削される。一方、II区南側では、SD01にきられるSX17を検出した。底面の形態等からSD01に直行する溝とも考えられるが、遺構の大半は調査区外へと続いたため、時期や性格等は不明である。また、II区北端では、弥生時代中期後半の性格不明遺構SX12が検出された。笠抜遺跡における調査成果を考慮すれば、なんらかの生産関連遺構である可能性が高い。

I区・II区では、本調査地点で検出が予測された旧白水川の北岸を確認できなかっただため、II区南西側に新たにトレーナーを設け調査を行った(トレーナー11)。その結果、旧白水川の幅はおよそ20m程度となることが判明した。

以下では、中世以前の各遺構の詳細について報告する。

(2) 遺構

SD01 (Fig.4・5、図版1-1・2、図版2-2・3、図版3-1・2・3)

II区南西からI区北へ調査区全体を縱断する水路である。I区で寺島遺跡の集落が展開する丘陵部にぶつかり、丘陵部に沿うように流れを北へ変えている。笠抜遺跡3次調査の成果から、調査区の南側を流れる白水川に鋭角をなして接続していたと推測される。また、SD01には、SX07・トレーナー1



拡張区・SX13の水口が3つとりついており、丘陵の東西にひろがっていたであろう水田に水を供給したと推測される。

SD01は標高13.8mで検出した。トレント1・2・6・8を掘削することによって形態と覆土、時期の確認を行ったが、遺物の出土量が少ないため、調査期間等を考慮して完掘はしていない。

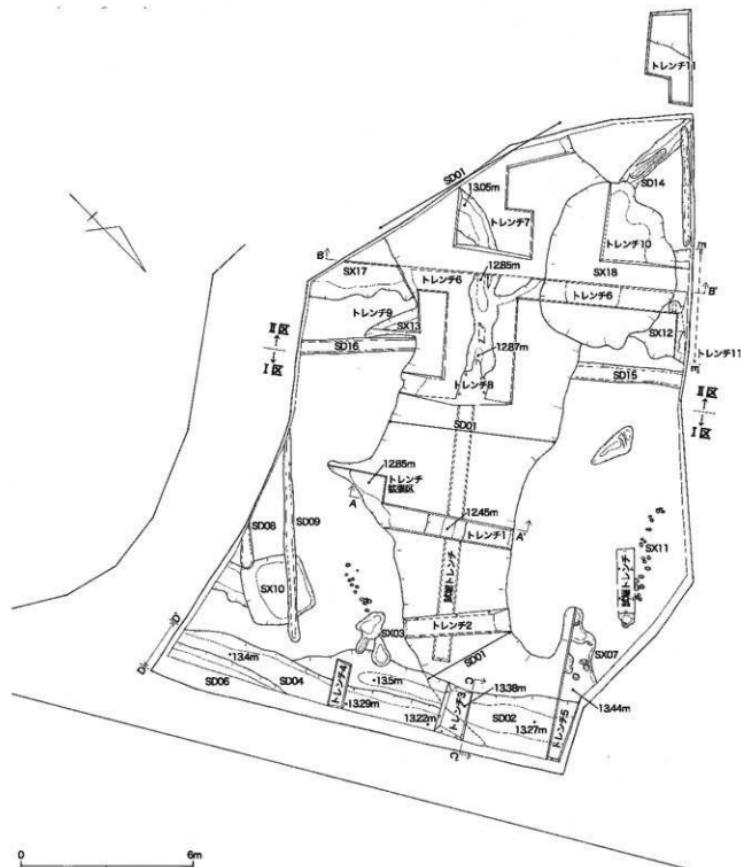


Fig. 4 遺構配置図(S=1/150)

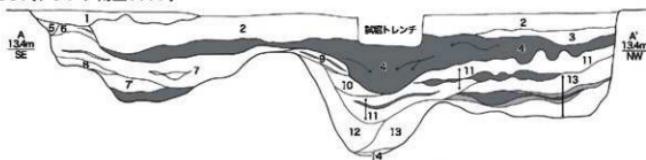


検出面における溝の幅は3.6m～7.5mをはかり、白水川から遠いほど溝幅は狭くなる。溝の断面形は台形をなし、中央部のみを0.4m～1m程度の幅をもって箱形あるいはU字形に一段深く掘削している。検出面からの深さは、台形の底面までは0.5m～1m、最も深い中央部分で0.9m～1.3mをはかる。

覆土は黒灰色粘質土と褐色砂を主体とする下層 (Fig. 5 土層5～14・21～25) と、灰色砂質土を主体とする上層 (Fig. 5 土層2～4・15・16) に分けられ、埋没しながらも機能し続けた様子がうかがえる。また、I区トレント1付近の検出面で確認された土層1 黒褐色土は、II区SX12の覆土に類似しており、SD01の流れがSX12を破壊した結果堆積したものと推測される。

遺物の出土量も少ないため時期の詳細は不明であるが、12世紀代に埋没が始まったと考えられる。

SD01(トレント南壁 A-A')



SD01 上層 1 黒褐色土(ロームブロックを多量に含み、しまり悪い)

SD01 上層 2 黒色砂質土(小石を多量に含み、マンガン・鉄分が沈着する)
3 黒色砂質土(ロームブロックを多量に含み、マンガン・鉄分が沈着する)
4 黑褐色砂質土(小石を含む)

SD01 下層 5 ロームブロック+褐色砂質土

6 黑褐色土+灰白色シルト

7 黑褐色土+灰白色シルト

8 黑褐色土+灰白色シルト

9 黑褐色砂質土(小石・ローム粒を含む)

10 黑褐色土(小石・ローム粒を含む)

11 黑褐色砂質土+灰白色シルト

12 黑褐色土(ロームブロックと灰白色土を含む)

13 黑褐色砂質土

14 黑褐色砂質土

SD01 上層 15 黑褐色土(粒子が細く、少量の砂質を含みマンガンが沈着する)

16 灰白色シルト+灰白色シルト

SX18 17 黒褐色土(粒子が細かく、少量の砂質を含みマンガンが沈着する)

18 黄色シルト(部分化粧が美しい)

19 黑褐色土(鉄分が美しい)

20 黑褐色土(砂質を含み鉄分が沈着する)

21 灰色シルト+灰白色シルト

22 黑褐色土+灰褐色土(砂質を含む)

23 黑褐色土(砂質を含む)

24 黑褐色シルト

25 黑褐色土

SD17 26 灰色シルト

27 灰色シルト+灰褐色土(マンガンが沈着する)

SX12 28 黑褐色土(粒子が細かく、黒褐色土+灰+土質片を含む)

29 黑褐色シルト

30 黑褐色土+黑褐色土(上部層を含む)

31 黑褐色土+灰褐色土(砂質を少許含む)

■ 黒褐色土 ■ 灰色シルト

SD01, SD17, SX12, SX18(トレント6南壁 B-B')土層

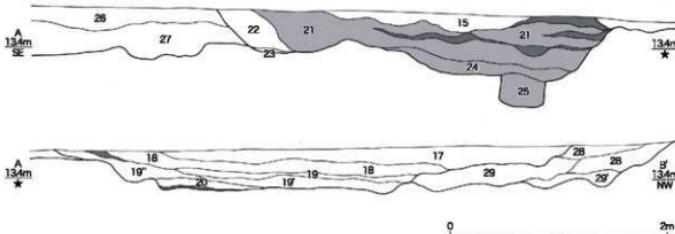


Fig. 5 トレント1・6南壁土層断面図(S=1/40)



【出土遺物(Fig.6・10)】

SD01の出土遺物は掘削した土量に対して少なく、どれも細片でローリングをうけている。1は弥生時代後期の短頸壺である。外面の口縁部と頸部の壇に丹塗の痕跡が残る。2は弥生土器壺である。胎土は赤橙色を呈し、小礫を多量に含む。弥生時代中期初頭のものである。3は弥生時代前期の壺である。摩減がすんでおり丹塗の痕跡や調整等は観察できない。4は、底部内面の釉が輪剥ぎされる白磁碗Ⅱ類。釉色は緑味をおびた灰乳色を呈する。12世紀後半のものである。5は白磁碗で、疊付まで灰乳色の釉がかけられている。胎土は灰白色の精緻なもので、焼成も良好である。6は黒灰色の滑石製石鍋である。11世紀代の所産とおもわれる。7は177.7gをはかる砂岩製砥石で、使用面は凹面をなさない。淡褐色を呈する。このほかに、ガラス小玉が1点出土しており、附論において詳細を報告しているので、参照されたい。

Fig.10の1・4は、水口SX07およびSX13から出土した遺物である。1は青灰色の石材を用いた石包丁である。4は弥生土器壺である。摩減が著しく調整等は観察できない。内面は黒色、外面は淡褐色を呈する。

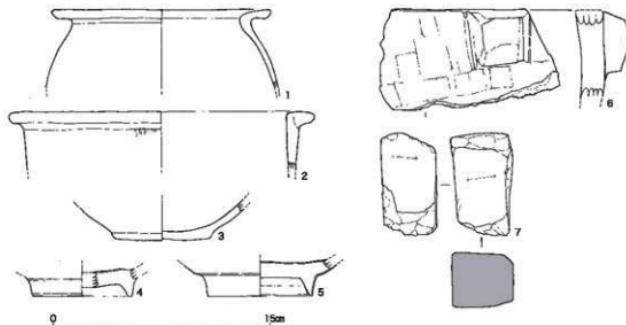


Fig.6 SD01出土遺物(S=1/3)

SX17 (Fig.4・5・10、図版1-2、図版3-2)

II区の南東隅に位置する性格不明遺構である。SD01にきられ、遺構の大半が調査区外へと統くため、形態や規模等も明かにできなかった。白色～灰色粗砂を覆土とすることから (Fig.5土層26・27)、調査区南側を流れる旧白水川と主軸を同じくする溝状遺構の可能性も考えられる。

出土遺物が少ないため、時期の詳細も不明であるが、12世紀代の遺物が出土するSD01よりは古いことは確実である。

【出土遺物(Fig.10の2)】

Fig.10の2は須恵器壺あるいは高杯である。焼成は良好で青灰色を呈する。

SX18 (Fig.4・5・10、図版1-2、図版3-3)

II区の西隅に位置する性格不明遺構である。標高13.7m前後において検出し、SD01およびSX12を破壊して掘削されている。南北-北東方向に長軸をもつ不整橢円形をなし、長軸5.8m、短軸4.5m。



検出面からの深さは0.4mをかる。壁面はゆるやかに傾斜して底面へ続いており、直立しない。底面は全体的に平坦であるが、一部凹凸のある部分もある。覆土は灰色シルト～灰色粘土を主体としており、底面に近いほど粘性が強くなる。

出土遺物が少ないため、時期の詳細も不明であるが、12世紀代の遺物が出土するSD01よりは新しい時期の遺構である。

〔出土遺物(Fig.10の3・5)〕

Fig.10の3は弥生時代中期の壺である。淡橙色～淡褐色を呈し、胎土には小礫を多量に含む。5は筑前型瓦器碗である。摩滅が著しく調整の痕跡は観察できないが、外底面には回転横ナデの痕跡がみられる。また、内底面には、ヘラミガキの痕跡とおもわれる輪状に白く色が抜けている部分がある。

SD02・04・06(Fig.4・7・8・図版4-1・2)

I区東端で、南側隣地との境界に沿って検出した溝である。SD01の埋没後に掘削される。調査時は3つの溝の切り合いと考えたが、

トレンチ3・4およびI区南東隅の土層から、掘直し

が複数回行われた一連の溝と捉えたい。

検出面の標高は13.9mをかる。

幅2m、長さ14.2mを検出したが、溝の東肩は調査区外へ続くため水路の規模は不明である。検出面からの深さは0.3m～0.6m程度で、底面の標高に傾斜はみられず平坦である。

覆土は灰色土～灰褐色土を主体とするが、溝底面では灰白色細砂や褐色粗砂が堆積し、流水環境にあったことがうかがえる。

前述したように、南側隣地は寺島遺跡の集落が展開する丘陵部となっており、調査地点は南側隣地より3m低く、土地境界には現在も機能している用水路が流れている。SD02・04・06は、現在も利用されている用水路の前身であり、SD01埋没後に寺島遺跡丘陵部裾に掘削されたと考えられる。



Fig. 7 トレンチ3北壁土層断面図・調査区東隅南壁土層断面図(S=1/40)

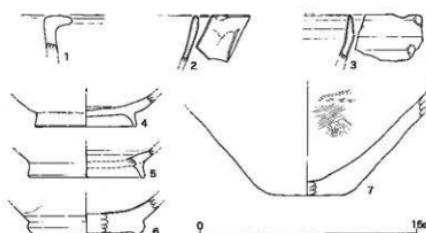


Fig. 8 SD02-04出土遺物(S=1/3)

以下に述べるように、出土遺物は古代～中世のものが中心で、近世の遺物は出土しなかった。切り合ひ関係からSK01より新しいことが確実であるが、時期の詳細は不明である。

[出土遺物(Fig.8)]

出土遺物は少ないうえに細片が多く、ローリングをうけている。1は弥生土器中期初頭の壺である。赤橙色を呈し、胎土には小礫を多量に含む。2は口縁端部に輪花をもつ龍泉窯系青磁碗である。連弁の彫りは明確ではない。灰白色の精緻な胎土に緑乳色の釉がほどこされる。3は龍口の天目茶碗。4・5は土師器碗である。4の胎土は淡橙色、5の胎土は淡褐色で、4にはごく少量の礫が含まれる。ともに10世紀代のものか。6は白磁碗IV類か。黄味のある白色の釉がかけられる。

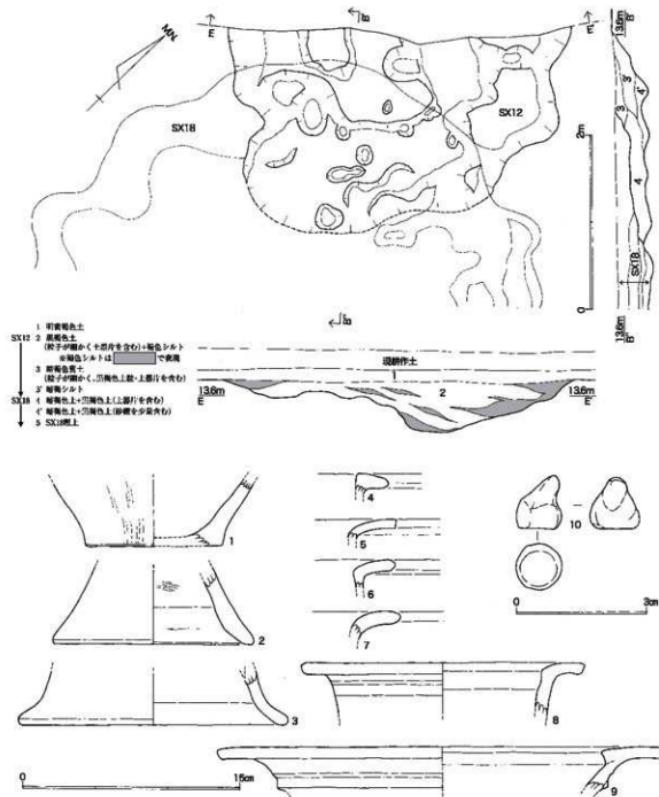


Fig.9 SX12平面図・調査区北壁土層断面図(S=1/50)・出土遺物実測図(S=1/3)



SX12 (Fig.4・9)

II区の北部に位置する性格不明遺構である。検出面の標高は13.8mをはかる。幅4m、長さ2.5m以上を検出したが、SX18にきられ、遺構の大半が調査区外へと続くため、詳細な形態や規模を明らかすることができなかった。検出面からの深さは0.2m～0.6m程度で、底面は一定ではなく、凹凸が著しい。覆土は、黒褐色～暗褐色土を主体とし、褐色シルトと互層となっており、滲水状況にあったことが推測される。笠抜遺跡1次調査で検出された、弥生時代中期後半の水溜状遺構や水路の覆土に類似する。

出土遺物より、弥生時代中期後半～後期の遺構であると考えられる。

[出土遺物(Fig.9)]

1は弥生土器壺である。淡褐色を呈し、胎土には小穢が含まれる。外面には粗いハケ調整がのこる。2は弥生土器の器台である。外面の調整はローリングをうけて残っていないが、内面にはハケ調整とナデの痕跡がみられる。3は弥生土器で高壺または器台の脚部か、底径18.4cmをはかる。胎土は橙色で、小穢を多量に含む。4～7は弥生土器壺である。4～6は中期、7は前期末か。4・7は胎土に小穢を多量に含み、胎土は粗い。8は弥生土器壺である。9は弥生時代中期後半の高壺である。摩滅がすんでおり調整等は観察できないが、丹塗の痕跡が内外面にのこる。10は不明土製品である。底面形は直径2.1mの円形をなし、高さは2.35cmをはかる。円錐の頂部を指でつまんでやや折り曲げたような形態である。淡褐色を呈し、胎土は特に精緻なわけではなく、SX12からともに出土した土器の胎土と同様に、小穢を含む。重量は9.2gをはかる。成形や調整に工具は使われていない。

(3) そのほかの出土遺物 (Fig.10)

1・4はSD01にともなう水口SX07・SX013から、2はSX17、3・5はSX18から出土したもので、これまでに各遺構の報告書中で記述した遺物である。

6は遺構検出時に出土した遺物で、白磁碗である。緑味のある白色の釉が施され、豊付から外底部は露胎となる。7・8は弥生時代前期の壺である。ともに淡褐色を呈し、胎土には小穢が多量に含まれる。7の外面にはハケ調整がのこる。9は弥生土器壺である。胎土は精緻で、明淡褐色を呈する。外面はナデで仕上げられている。

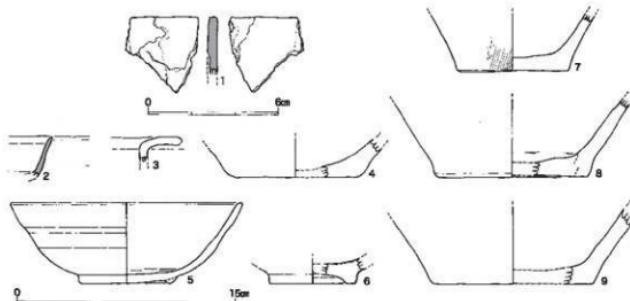


Fig.10 そのほかの出土遺物実測図(S=1/3)



4. 小結 (Fig.11)

第11図は、本調査地点周辺の古地形図に、周辺の調査地点の成果を合成したものである。寺島遺跡1次調査地点のみ標高16mをはかる丘陵上に位置しており、本調査地点および笠抜遺跡1次・3次調査は標高14m前後の低位部にある。

笠抜遺跡3次調査および笠抜遺跡1次調査C区、本調査トレンチ11から、旧白水川を検出することができた。川幅は最大で20mをはかり、古地図から南東方向-北西方向へ流れると推測される。

旧白水川には、笠抜遺跡1次・3次調査で検出された突宍文単純段階の給水路SD05、弥生時代中期後半～後期初頭にかけての貯水施設と祭祀関連遺物と同時期と考えられるSD01、奈良時代の条里方向を指向するSD02などの水路が接続しており、旧白水川は、縄文時代晩期末以来、周辺の水田に水を供給していたことがわかっている。また、笠抜遺跡3次調査では、旧白水川から弥生時代中期の井堰はみあたらず、9世紀代～中世後半・近世までの杭列が検出されていることから、旧白水川は幾度となく流路変更を繰り返していたと推測され、時代ごとに人々が治水に工夫をしてきたこともうかがえる。

本調査で検出したSD01もそのような水路のひとつであり、旧白水川にはほぼ直角にとりついていたと考えられる。調査区を縦断し、寺島遺跡集落域が展開する丘陵にぶつかって進路を北へ変え、丘陵麓に沿うようにして流れ、丘陵西側にひろがる水田に水を供給したと推測される。SD01は12世紀代にはその役割を終えたと考えられる。

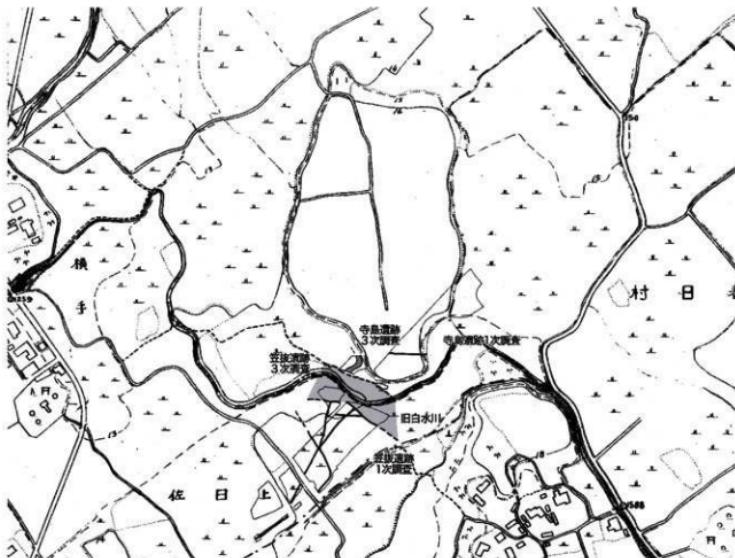


Fig.11 大正末～昭和初期の地形図と寺島遺跡3次調査地点 (S=1/4000)



附論 寺島3次調査出土ガラス小玉について

福岡市埋蔵文化財センター 西澤千絵里（2012年9月現在）

SD01(トレンチ8)より、淡青色透明を呈するガラス小玉が1点出土している。寸法は径3.24mm、厚2.43～3.14mm、孔径1.36mmで、重量0.036gをかる小型の若いいびつな玉である。

資料に対して顕微鏡観察を行なった結果、ガラス内部に大小さまざまな球形の気泡やそれらの一部の気泡が孔に平行して列をなしている状況、気泡が孔方向に若干梢円状に伸びている様相が確認できた。これらの気泡から、ガラス小玉は融けたガラスを引き伸ばして成形する引き伸ばし技法を使用して製作されたと判断する。一本の筋のような気泡が観察されず球形の気泡が多い点から、引き伸ばし法成形の後に再加熱がはどこされたと考える。

蛍光X線分析装置を使用した材質調査も行ったところ、ケイ素、カリウム、銅、鉄、カルシウム、アルミニウム、鉛が検出できた。ガラスの主成分であるケイ素のほかにカリウムの検出反応が顯著である点から、カリウムを主な融剤とするアルカリケイ酸塩ガラスの一種のカリガラスであると思われる。カリガラスは青緑色透明のものと淡青色透明を呈するもの大きく二種類のグループに分類できることが知られており、前者の着色にはコバルトが、後者の着色には銅もしくは青銅が使用されていることが指摘されている〔肥塚ほか2010〕。本資料についても銅と微量の鉛が検出されており、銅・青銅を着色剤としたカリガラスであると思われる。

【参考文献】

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』566号 文化庁文化財

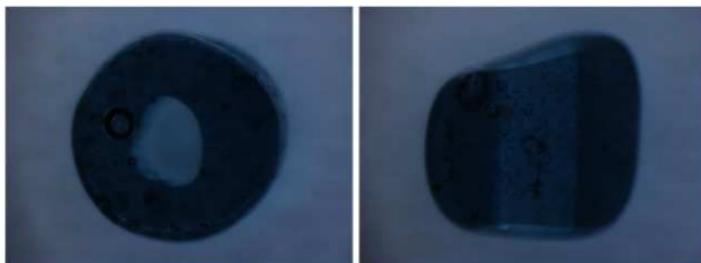


Fig.12 SD01出土ガラス小玉顕微鏡写真



図版 1



1 I 区全景(南西から)
2 II 区全景(南から)



図版2



- 1 拡張トレーナー(北西から)
- 2 SX07(北西から)
- 3 SD01 トレーナー1 拡張区南壁土層堆積状況(東から)



図版3



1 SD01 トレンチ 1 南壁土層(北から)
2 SD01・SX17 トレンチ 6 東部南壁土層(南東から)
3 SD01・SX18・SX12 トレンチ 6 南壁土層(北から)



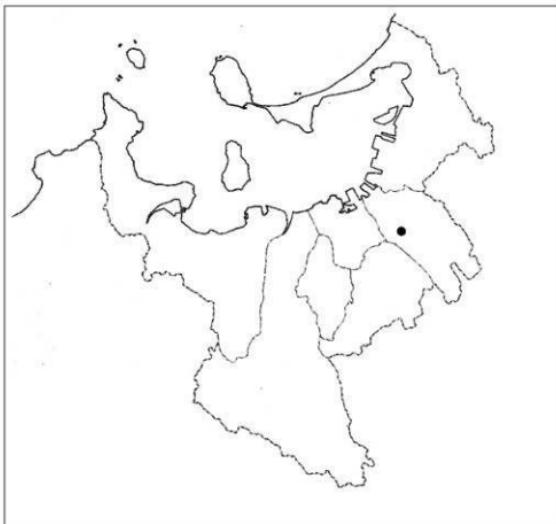
図版4



- 1 SD01・02・05 トレンチ3北壁土層(南東から)
- 2 SD05・06 I区東隅土層(北西から)
- 3 SX12完掘状況(南東から)



第2章 比恵遺跡群第86次調査の記録



調査番号 0324

遺跡略号 HIE-86

例言

1. 本章は、福岡市博多区山王1丁目における老人ホーム建設事業に先立って、福岡市教育委員会（調査時点）が平成15年度に発掘調査を実施した、比恵遺跡群第86次調査について報告するものである。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課）の大塚紀宜が行った。
3. 方位はすべて座標北である。また、座標は、日本測地系（第Ⅱ系）を用いている。
4. 本書に掲載した遺構・遺物の実測・写真撮影・製図はすべて大塚が行った。





1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

平成15年6月9日、株式会社創生事業団より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（当時。以下、埋蔵文化財課と略称）に対して、福岡市博多区山王1丁目104-1、105、129-1における老人ホーム建設に先立ち、埋蔵文化財の有無について、照会文書が提出された。（事前審査番号15-2-207）埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていることと、この敷地内で昭和63年度～平成元年度と平成14年度にかけて計4次の試掘調査を行っていることを確認した。これらの試掘調査の結果と近隣の発掘調査の成果もあわせて、大宰府から延びる官道が敷地内を通る可能性が指摘されたため、申請者と埋蔵文化財課で協議を行い、工事予定部分の一部で確認調査を実施することで合意した。

発掘調査は平成15年6月26日から同年7月2日まで実施した。

(2) 調査組織

組織名称・所属はいずれも調査当時のものである。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査統括：埋蔵文化財課 課長 山崎純男 調査第2係長 田中壽夫

調査庶務：文化財整備課 管理係 御手洗清

事前審査：埋蔵文化財課 事前審査係 米倉秀紀 久住猛雄

調査担当：埋蔵文化財課 調査第2係 大塚紀宜

整理主体：福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（平成24年4月1日付で移管）



Fig.1 調査地点位置図(1/4000)



2. 調査の記録

(1) 調査概要

比恵遺跡群第86次調査地点は比恵遺跡群全体の東側部分に位置し、御笠川東岸に近い部分に立地する。現況で標高6m前後を測る。

周囲は市街化が進んで高層の建物が林立し、現在では旧地形はおろか周囲を見晴らすことも極めて困難な状況である。市街化以前の状況を古い地形図で確認すると、沖積地を利用した水田が広い範囲に渡っていたことがわかる。畦畔や道路の方向より律令時代の条里制の名残が遺存していたことが窺える。第86次調査地点は水田域と台地上の畠地域が交錯する範囲にあり、台地に入り込んだ細い谷部分にあたっていたと推定できる。

計4次の試掘調査では明確な遺構は検出されなかったが、以下の点より確認調査が必要と判断され、発掘調査の実施に至った。

1. 比恵遺跡群第79次調査の結果、大宰府から延びる官道がこの付近を北西～南東方向に走る可能性があることが判明していた。官道の方向はこの付近では当時の条里方向とほぼ一致し、すなわち現在の筑紫通りとほぼ並行する。第79次調査で検出された官道を北西方向に延長すると、今回の第86次調査地点を通過すると考えられた。

2. 試掘調査の結果、敷地内に高低差1m以上の人工的な段造成が施されている可能性が考えられた。段造成が存在する場合、それが道路の切通し状の造成痕跡の可能性がある。

以上の理由から、道路状遺構の有無を主眼とした確認調査として、第86次調査は実施された。調査区は道路状遺構を捕捉するために東西方向のトレーンチ状に長く設定された。調査面積は115.6m²である。

(2) 調査状況(Fig2)

調査は対象範囲のアスファルトを撤去し、造成土を除去することから開始し、その後包含層を掘り下げていった。造成土は全体に1m以上堆積しており、その下層は調査区東側では黄褐色粘土（水田床土）、薄灰褐色粘土（水成層か）、暗灰褐色土（水田以前の旧耕作土）が各10cm前後の厚さで堆積し、地山の明褐色ローム層に達する。調査区西側では造成土の下に灰色土（水田耕作土）、薄灰褐色粘土（水性層か）、暗灰褐色土（旧耕作土）、黒色粘土が堆積する。

遺構面は調査区中央部から東側ではほぼ平坦である。調査区西側で緩く傾斜する状況がみられ、調査区の西側に谷状の地形が存在したものとみられる。ただし調査区内でみられる傾斜は緩く、谷状の地形もいわゆる渓流やV字谷ではなく、浅いU字形であることが想定できる。この調査区西側の谷部分は削平高の下部に黒色粘土による包含層が遺存しており、今回の調査で出土した遺物の大半はこの包含層中からのものである。

以下、調査区の東側平坦部、西側斜面部分それぞれの状況を詳細に見ていく。

東側平坦部

調査区東壁から14mまでの範囲を東側平坦部とする。この部分では遺構面が標高4.4mでほぼ一定しており、細かい凹凸を除いて高低差はない。東側壁際で遺構面に深さ15cm程度の深い凹凸が集中する箇所があるが、人為的な土坑ではないとみられる。また中央部に深さ10cm未満の浅い皿状の掘り込みが列状に並ぶ部分がある。当初官道にともなう道路状遺構の痕跡とも考えたが、規模、方向性より該当しないものと考えた。調査区中央部付近の大小の不整形の凹凸についても深さが

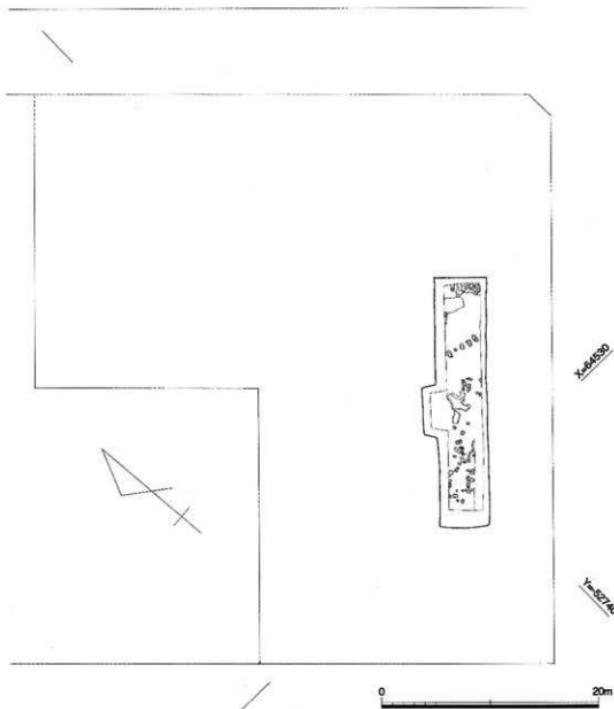


Fig.2 調査区位置図(1/400)

10cm未満と浅く、有意な土坑とは考えにくい。

これらの凹凸は造成あるいは耕作に伴って生じたもので、人為的な遺構とは考えられない。また道路状遺構に類する波板状の痕跡とも異なることから、官道に直接関連する遺構とも考えられない。

また、平坦面の部分では遺構面上に黒色粘土の包含層が認められない。これは後世にこの部分が平坦に造成されたことを示しており、古代以前の地形をとどめていないと考えられる。

西側斜面部分

調査区西側は緩い傾斜面になっている。その傾斜は45cm/7mという、極めて緩いものである。この部分については南半部分を遺構面下の八女粘土までトレンチ上に掘り下げている。

遺構面は水分を多く含む軟弱な地盤で、小ピットや不整形の凹凸が多数認められた。ピットはほとんどが木根や浅い窪みで、建物を構成する柱穴は見られない。不整形の凹凸もシミ状の色調の変化を

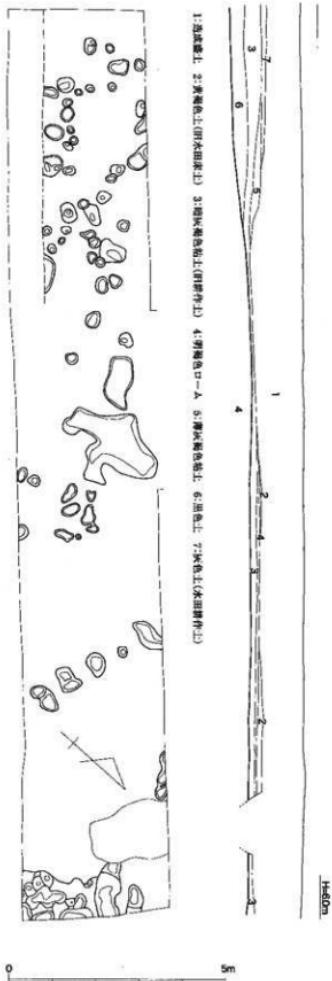


Fig.3 調査区全体図(1/100)

誤って掘り下がるものや木根などで、人為的な土坑や柱穴は認められない。

西側斜面部分の遺構面直上には、30cmの厚さで黒色粘質土が堆積し、遺物包含層を形成する。この黒色土には古墳時代・古代の遺物が含まれるが、それ以降の時代の遺物が含まれないことから、古代に堆積した層が遺存しているものと考えられ、この部分の遺構面については後世の削平を受けていると思われる。

包含層出土遺物 (Fig.4)

1~8は弥生土器。1は弥生中期の壺形土器口縁部で、鈍先状口縁を呈する。内外面は丹塗りの可能性もあるが、風化・摩耗著しく器壁調整は不明。2~4は弥生中期の壺形土器口縁部。2はL字状口縁で口縁端部は外側に太く突出する。3は口縁端部が外側に水平に長く突き出す。4は大型甕で、口縁部は外側に太く突き出す。肩部は丸くなることが予想され、要棺の可能性も考えられる。5は弥生後期末の壺形土器口縁部破片。口縁部は長く外溝して立ち上がり、外側面にハケ目が残る。6は壺形土器底部破片。わずかに上げ底で、器壁は上方に大きく開く。外面は風化・摩耗が著しく、調整は不明だが丹塗りの可能性もある。7は壺形土器底部破片で、外面は縱方向のハケ目、底部はやや上げ底になると考えられる。8は甕の一部と考えられる。

9は土師器小型甕。頸部は肩部から軽く縮まり、口縁部は内湾しながら立ち上がる。肩部は鉢状を呈する。外面にわずかにハケ目が残る。

10~14は須恵器で、古墳時代中期~後期のものである。10は壺蓋で、天井は低く、口縁部付近は直立し、難部は小さく外側に突出する。天井部外面付近のみ回転ヘラ削り。11~13は壺身。11は受け部立ち上がりが太く直立し、壺部は丸く、底部1/2回転ヘラ削り。12は立ち上がり部のみの破片で、立ち上がりは外溝して細長く直立する。13は立ち上がりは外溝して細く立ち上がる。体部は丸く、底部1/2回転ヘラ削り。14は甕口縁部。口縁部は外側に大きく開き、端部は太く丸め、口縁直下に突帯をつける。

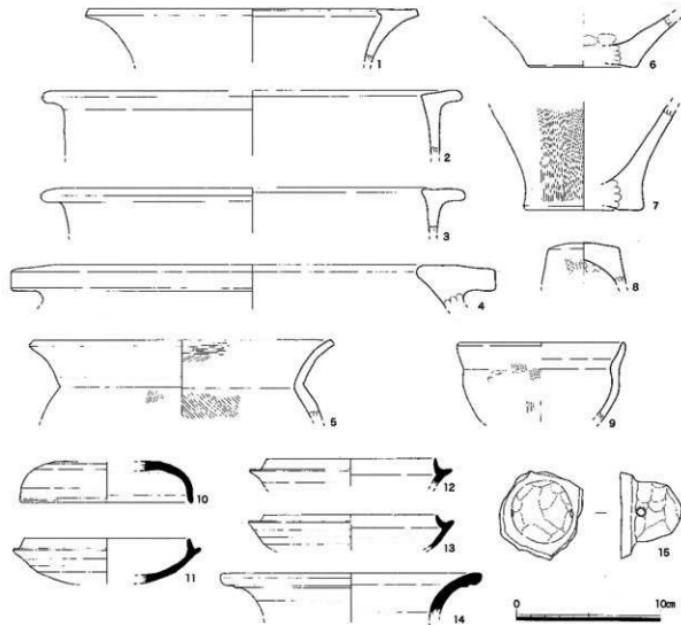


Fig.4 出土遺物実測図(1/3)

15は土師器把手部分を再利用した土製品とみられ、円形の把手の周囲を打ち欠いて整形している。把手中央に穿孔が施されているが、これは焼成前に開けられたものである。裏面にはハケ目が施されている。

3. 小結

調査区中央部から東側では遺構面はほぼ平坦面で、さらに本来形成されているはずの黒色粘土の包含層も遺存していない。本来の台地面を大きく削平して耕作地を造成したものと考えられる。耕作土の堆積も非常に薄く、近世以降に削平・造成が行われたことが考えられる。

今回の調査結果からは、直接官道の存在を確認できる遺構・遺物は認められなかった。ただしこの結果は後世の削平によるものであり、この地点を官道が通過していなかったとは断定することはできない。官道の位置については周辺での調査成果を集成し検討することで、詳細な位置を確定することが必要であろう。



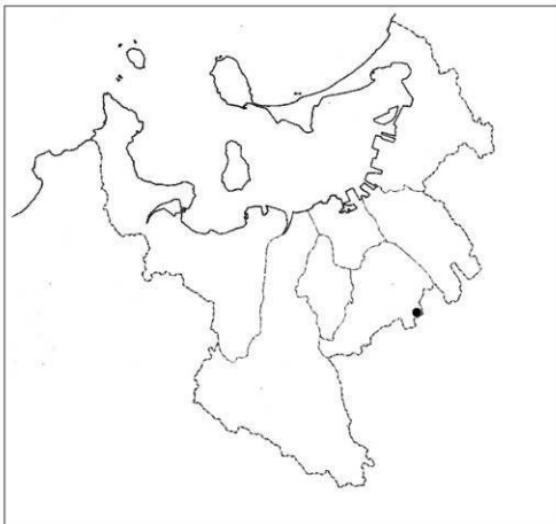
1.調査区全景(南西から)



2.調査区南半部(南西から)



第3章 弥永原遺跡第10次調査の記録



調査番号 0727

遺跡番号 YNB-10

例言

1. 本章は、福岡市南区日佐3丁目における共同住宅建設事業に先立って、福岡市教育委員会（調査時点）が平成19年度に発掘調査を実施した、弥永原遺跡第10次調査について報告するものである。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課）の加藤良彦が行った。
3. 方位はすべて磁北であり、真北より $6^{\circ}40'$ 西偏している。また、座標は、日本測地系（第II系）を用いている。
4. 遺構は、構をSD、性格不明遺構をSXと略号化して、記述した。
5. 本書に掲載した遺構・遺物の実測・写真撮影・製図はすべて加藤が行った。





1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市南区日佐3丁目91-2地内において、個人による専用住宅建設に当たって、埋蔵文化財の有無の照会のため、平成19年7月6日に事前審査願いが埋蔵文化財第1課(当時)に提出された事により始まる。申請面積は296.42m²、受付番号は19-2-273である。

埋蔵文化財第1課で確認した所、申請地が弥永原遺跡の隣接地に位置するため、内容など状況を把握するため19年7月17日に確認調査を実施し、その結果、地表下90cmの赤褐色土上で古墳時代の遺構を検出した。このため、小丘陵部分の包蔵地を、申請地の北側道路まで拡大修正を行った。

同課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断された。よって遺跡の破壊を伴う建物部分に限定して、本課が記録保存のため、事前の発掘調査を実施する事となった。

発掘調査は平成19年8月1日に着手、同年8月11日に全ての行程を終了した。

調査番号	0727	遺跡略号	Y N B-10
調査地地籍	南区日佐3丁目91-2	分布地図番号	26(上日佐)
開発面積	296.42m ²	調査実施面積	69.24m ²
調査期間	070801～070811	事前審査番号	19-2-273

(2) 調査の組織

発掘調査(平成19年度)

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣

【調査総括】文化財部長 矢野三津夫 埋蔵文化財第1課長 山口譲治

調査係長 米倉秀紀

【調査庶務】文化財整備課 鈴木由喜

【発掘調査】加藤良彦

【発掘作業】水田豊彦 原田浩 藤村正勝 浦伸英 中村尚美 中野暢子

整理報告(平成24年度経済観光文化局)

【整理作業】国武真理子

2. 調査区の立地と環境

調査区は、福岡平野の南部、那珂川・御笠川に開析された樹枝状に広がる洪積丘陵群である春日丘陵の西側に派生する細長い支丘上に立地し、このうち幅100m程北西に突出した小支丘の先端部に位置する。周辺域は須恵廬本遺跡をはじめとする弥生後期における奴国の中核地域として広大な遺跡群が広がり、本遺跡もこの遺跡群に含まれる。



本遺跡は、1958年(昭和33年)、福岡女学院建設時に弥生時代埋葬遺跡である日佐原遺跡として知られていたが、本市の遺跡分布地図作成時に、西側中位段丘部の弥永原遺跡に統合されているところから、1次調査の整理がなされていない。前述の日佐原遺跡とされる調査で、尾根線上の石蓋土壙墓・箱式石棺墓・壺棺墓からなる弥生後期墳墓群と東南側の中期壺棺墓が検出され、石蓋土壙墓から内行花文鏡・玉類が、箱式石棺墓から鉄斧・鉄刀・玉類が出土している。弥永原1次調査は1959年ガラス勾玉鋲型が発見され、場所は3次調査A地点環溝内とされる。2次調査では1965年弥生後期の環溝・住居が検出され、1次と対になるガラス勾玉鋲型が出土した。3次調査は1967年、多くが2次調査と重複し、弥生後期の竪穴住居跡から小形彷製鏡が出土した。4次調査は1988年、本調査区の南側で、弥生後期の溝・古墳後期の竪穴住居跡が検出された。5次調査は1996年、弥生後期の竪穴住居跡を検出。6次調査は2002年、弥生中期～後期の壺棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓・箱式石棺墓の墓群が検出され、後期の墓群から水銀朱・小玉が出土している。7次調査は2002年、弥生後期の環溝・8次調査は2003年、弥生後期の竪穴住居跡を、9次調査では2006年、弥生後期～終末期の竪穴住居・土壙墓を検出し、主に弥生後期前半を中心とした集落・墓群の様子が明らかになりつつある。

調査は、8月1日に重機による表土剥ぎを実施し、2日、作業員6名を導入し遺構検出を開始。台風の影響で6日より遺構掘削を開始し、10日に掘り上がり全景を撮影。測量・実測を完了し、同日午後調査機材を撤収し、11日重機による埋め戻しを実施し、調査を完了した。

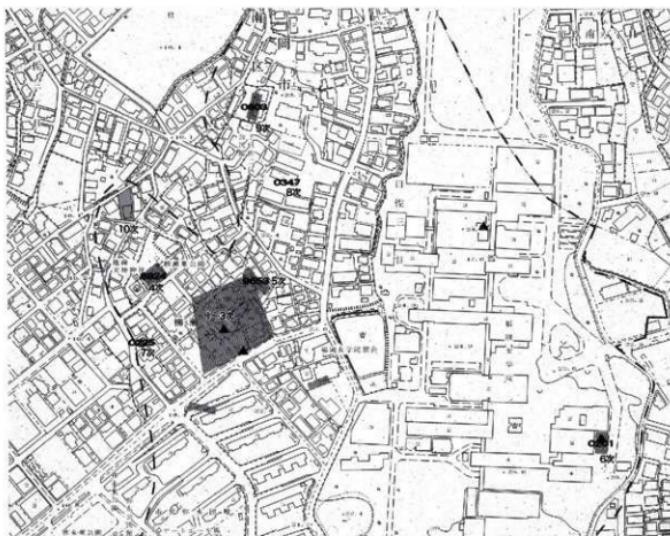
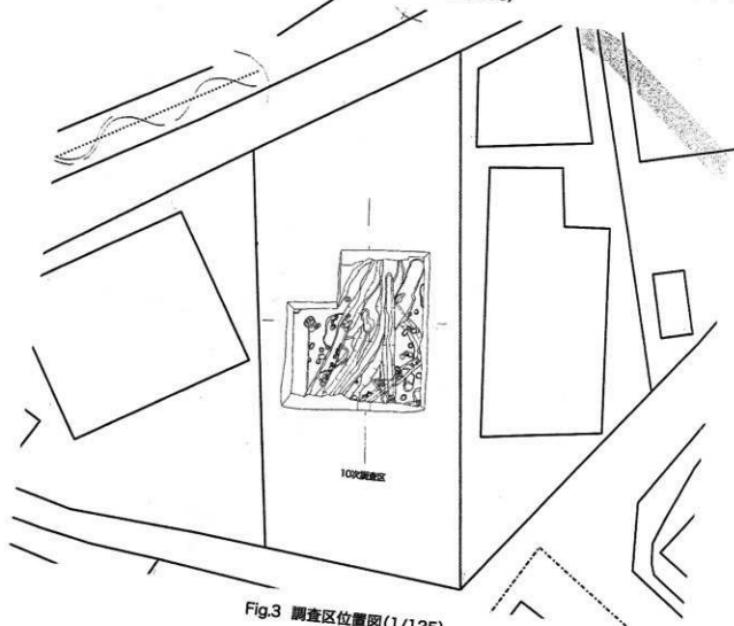


Fig.1 周辺調査区位置図(1/4,000)





3. 調査の記録

1. 調査の概要

基本層序(Fig.5 図版2-3)は60cm程の花崗岩バイラン土客土(a)、15cm程の水田耕土(b)、5cm弱の底土(c)下、5cm程の近世包含層(1a耕土か)をはさんで下の基盤層は花崗岩バイラン土の再堆積層で、標高15.6mを測る。検出した遺構は古墳時代前期溝2条、古墳時代後期溝2条・土塹2基、古代溝1条・土塹1基、近世溝1条・他柱穴である。古墳時代を中心とし、集落の外縁となる溝4条が丘陵に沿

って重複して検出され、前期前半期の溝を最古とするが、弥生中期後半～後期前半土器が多く混入するため、同期の溝も重複する可能性がある。溝は最大で幅2.4m深さ55cmを測る。これらは近世に削平され、磁北に近い方向の溝SD03、1条が切る。

遺物は、古墳時代を主に溝から、弥生時代中期から江戸時代の弥生土器・土師器・須恵器・肥前系陶磁器等をコンテナ6箱分検出した。

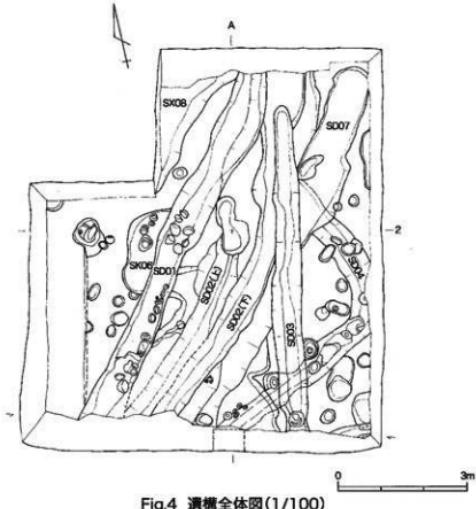


Fig.4 遺構全体図(1/100)

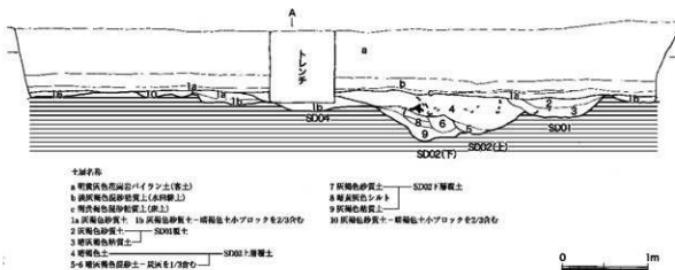


Fig.5 南壁土層断面図(1/50)



(2) 遺構と遺物

① 溝

溝はSD01・02・03・04・07の5条検出した。SD04・03以外は丘陵裾に沿っている。土層はSD02上層下部(5・6層)に砂混じりの堆積がみられるが、大半は粘質土であり、水が流れた状況ではない。SD02は遺物の出土状況と土層断面から上層を古墳後期、下層を古墳前期の別個の遺構と判断した。SD07は遺物・切り合ひからSD02上層と同一の溝である可能性が高い。SD04は区画溝で、住居の壁溝の可能性もある。SD03は現地割りに沿っている。時期はSD04・02下層が古墳時代前期前半、SD02上層・SD07が古墳時代後期、SD01が7世紀末、SD03が近世前半である。

SD01 (Fig. 4 図版1-2・2-4)

調査区東部を丘陵に沿って北流する。下半には粘質土が堆積し、淀んだ状態である。幅110深さ20

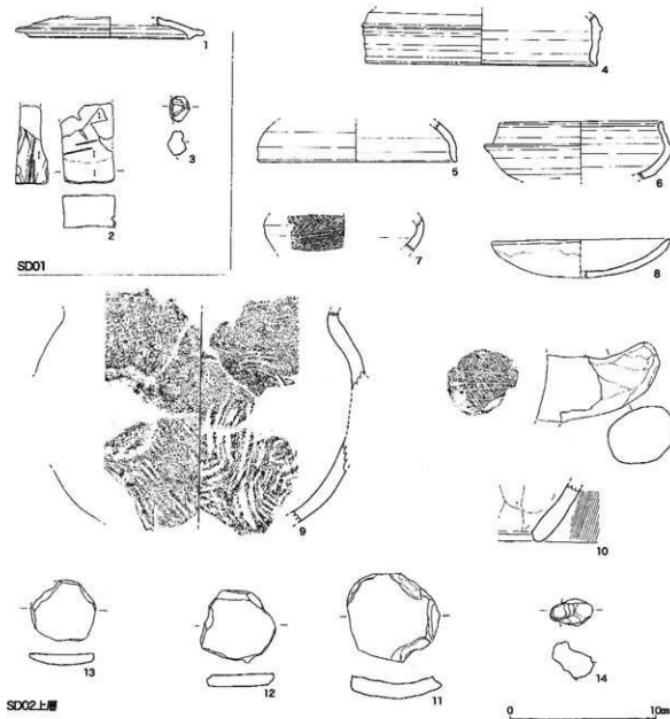


Fig.6 SD01・SD02上層出土遺物実測図(1/3)



cm程。底面の一部に鋸の掘削痕が残る。

出土遺物 (Fig. 6 図版2-7) 1は須恵器坏蓋。偏平な器体で受部が低い。口径10.9cm高1.6cm。淡赤褐色を呈する。2は中粒砂岩製砥石。縦2.3横3.6cmの方形で、小口は截打で平面調整。4面を砥面とし表裏が1cm弱研ぎ減る。3は円形鍛冶溝の縁断片。上面赤褐色で滑らか、下面・断口は暗灰褐色でガラス化し、小気泡多数。16×13×16mm3gを測る。7世紀末。

SD02上層・SD07 (Fig. 4 図版2-2)

調査区中央をSD01に平行して北流し、これに切られる。下面に暗灰褐色混土が堆積し、炭灰を1/3含む特異な堆積を示す。遺物は上層の暗褐色土(4層)中から多く出土する。幅240深さ25~45cmを測る。SD07は同一の溝である可能性が高い。

出土遺物 (Fig. 6 図版2-7) 4~7は須恵器。4はII期。口縁内外は回転ナデ外面境に突帯。中位から上に回転ケズリ。口径15.8cm。外面暗灰、内断面灰色。5はIII期。口径13.5cm。内外回転ナデ。外面黒灰、内面暗灰、断面灰色。6はIII期坏身。受部径13.4cm。内外回転ナデで外面体部下半は左回転ケズリ。外表面暗灰色。7はIV期。體部。胴径11.0cm。外面下位回転ケズリ、カキメ工具の羽状文を施す。外面黒灰内面灰色。8~10は土師器。8は皿。口径12.3cm高2.6cm。外面口継下ケズリ後ヨコナデ、内面カキメ後ヨコナデ・ケンマ。淡赤橙色。9・10は瓶。9は軟質系。径22.6cmの丸い体部の外面に格子叩き、内面に平行弧当具痕が残る。頸部内外ヨコナデ。外表面暗褐色内面淡褐色。2mm以下の砂粒を多く含む。10は円筒形で。底面に大きな2孔をもつ。把手内面に不定方向ヘラ沈線、下位内面は継ケズリ後ナデ。赤橙色。11~13は土師器甕素材の土器片円盤。外周を打ち欠き整形。11は径6.2cm41g。12は径4.7cm22g。13は径4.3cm12g。14は円形鍛冶溝の縁断片。上面褐色、融解で滑らか、下面粘土付着で褐~茶褐色。断口は被熱で融解。29×20×16mm10gを測る。7世紀初。

SD02下層 (Fig. 4 図版1-2)

SD02上層の下位で検出された。調査時、同一の溝の改削によるものと判断して掘削したが、整理時に遺物の時期差が大きいことが判明し、別個の溝と判断した。大半をSD02上層に切られるが、若干北に湾曲する。幅200深さ55cm程の溝と考えられる。下面に灰褐色粘質土が堆積し、水が流れた状態ではない。古墳時代前期前半。

出土遺物 (Fig. 7 図版2-7)すべて土師器である。15・16はSD02下層出土。15は山陰系低脚坏の脚部。径8.8cm。外面ヨコハケ後ヨコナデ内面放射状に工具痕を残すヨコハケ中央に径5mmの圧痕。黄橙色。胎土精良。16は高脚部で脚径11.8cm。くびれ部の対面に径1.2cmの焼成前穿孔2孔。内面はヨコハケ後ヨコナデ。坏部との接合面にはタテヘラ押し圧痕が残る。赤橙~黄橙色。17~29は上層混入資料。17・18は小形器台。17は口径10.5cm高9.6cm。体部外面はケズリ後ナデ・ケンマ。脚内面下位はナナメハケ後指頭圧、上位はヨコケズリ。対面に径1.1cmの焼成前穿孔2孔。暗黄橙~赤橙色。18は口径9.4cm高9.6cm。くびれ部にハケ工具圧痕。脚内面はナナメハケ後指頭圧。対面に径1.1cmの焼成前穿孔2孔。口唇は意図的に打ち欠く。黄橙~赤橙色。19は小形短脚坏か。径8.2cm。内面ヨコナデ後ケンマ外面下半ケズリ。外表面淡橙内面黄橙色。胎土精良。20~22は高坏。20は復元口径18.8cm。体部中位で屈折し段をなす。脚の屈曲・膨らみは緩い。対面に径1.1cmの焼成前穿孔2孔。外表面淡赤橙内面黄橙色。21は口径21.0cm。体部緩く内済し下位で段は沈線化。外ヨコハケ後ヨコナデ・ケンマ内面ケンマ。対面に径0.9cmの焼成前穿孔2孔。淡赤橙色。23~29は甕。23~26は布留式。23は口

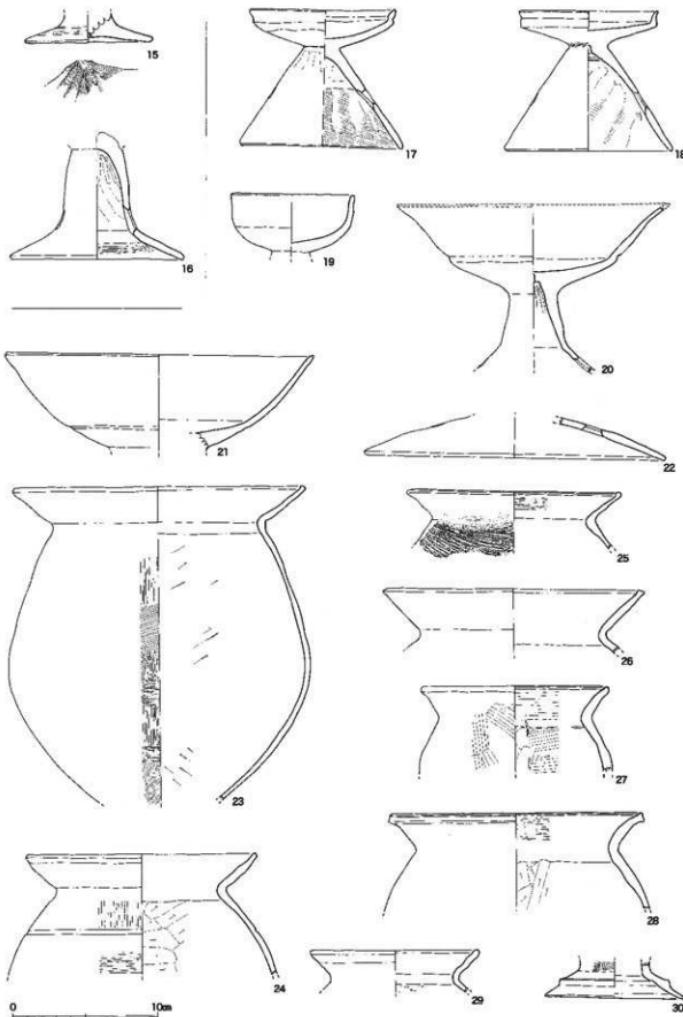


Fig.7 SD02下層出土遺物実測図(1/3)



径19.8胸径20.8cm。口唇内面が肥厚、内外ヨコナデ。胴部外面タテハケ後帶状にヨコハケ、内面上位右上がりケズリ中位ヨコケズリ。外面灰褐色内面暗灰黄色。25は口径14.6cm。口唇が沈線気味に、内面が肥厚、内外ヨコハケ後ヨコナデ。胴部外面細かな平行タタキ、内面ケズリ後ヨコナデ。外面淡灰褐色内面明灰黄色。26は口径17.2cm。口唇が凹線気味に、内面が肥厚、内外ヨコナデ。胴部内面右上がりケズリ。淡褐色。27～29は布留式の影響を受けた甕。27は口径12.8cm。口唇が斜めに、内面が肥厚、内外粗いヨコハケ後緩いヨコナデ。胴部外面ヨコナデ後タテ・ナナメハケ、内面ケズリ様の横板ナデ、頸部にヘラ当痕。淡褐色。28は口径17.2cm。口唇が凹線気味に、内外面が肥厚、内外ヨコハケ後緩いヨコナデ。胴部タテ・ナナメケズリ。淡赤褐色。29は口径11.5cm。口唇が斜めに、内面が肥厚、内外ヨコナデ。胴部内面ヨコケズリ。外面淡赤橙～淡灰褐色内面淡褐色。30はSD07出土短脚土器脚部か器台脚部。径9.6cm。外面中位が段をなす。外面ヨコナデ上位はタテハケ後緩いヨコナデ。内面ナナメハケ後凹線にヨコヘラナデ、上位ヨコケズリ。淡黄灰～淡褐色。

SD03 (Fig. 4 図版1-2)

調査区東部を現地割りに平行して北流し、SD02・04を切る幅65深さ20cmの浅い溝。IV～VII期の須恵器・土師器・弥生土器等を多く出土するが、灰褐色砂質土で近世耕土と同一であり、肥前系白磁・陶器皿をそれぞれ1点検出したため、近世前期と判断した。耕作に伴うと考えられる。他に玄武岩製磨製石斧・黒曜石製石刃・鍛冶滓片（32）を出土。

SD04 (Fig. 4 図版2-4)

調査区東部で矩形に屈曲し、SD02・03・07に切られる幅40深20cmの小溝。須恵器3片を含むが古墳前期の土師器がやや多く出土し、SD02出土高環19と同個体の破片を含む。遺構の切り合いかからも古墳時代前期前半と判断した。近世の開墾と西部の大半を後代の溝に切られるため、明確ではないが同期の竪穴住居の壁溝の可能性も考えられる。

②土壤

土壤は古墳後期でSK06・段状のSX08、奈良前期でSK05の3基を検出しているが、いずれも断片を知り得るのみで、全体が明確ではない。遺物もSK05からは土師器13片・須恵器壺蓋1片、SK06からは土師器12片、SX08からは土師器8片・鍛冶滓1片（31）が出土している。

4. 小結

小支丘部での古墳時代集落の外縁部に当たり古墳時代前期、後期、古代の溝が軌跡に同方向に重複する。本調査区が遺跡内で丘陵裾の低位段丘上の、最低位に位置しており、遺跡の外縁を示している。支丘の基部に位置する第7次調査で弥生終末期の東西方向の溝が確認されており、この丘尾切断溝とともに一集落のまとまりを示すものと考えられる。丘陵尾根部から西にかけてはいくつかの区画溝と思われる溝が検出されており、内部にさらに小単位の集落が分布している。

遺物は弥生中期～後期前半のものがかなりの量を占めており、遺跡の中心時期が弥生後期前半であることからすると、以南の4・7次調査区にかけ同期から古代にかけての集落が広がっている可能性が高い。また、古墳時代後期・古代の溝から出土した鍛冶滓は、春日丘陵が奴国を中心域であったことからして、鍛冶工房の存在を示している。



図版 1



1 調査区全景(北から)



2 SD01・02・03(北から)



図版2



3 南壁土層断面(北から)



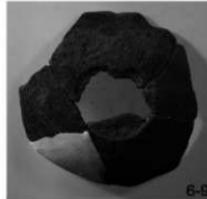
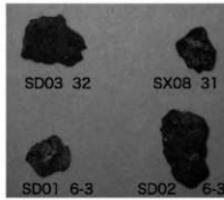
4 SD01跡痕(西から)



5 SD04(東から)



6 SK05(西から)



7 出土遺物

報告書抄録

上りがな	ちゅうなんぶじゅういち						
書名	中南部II						
著者名	- 今島道勝第3次調査・比奈道勝第8次調査・佐永良道勝第10次調査の集計 -						
シリーズ名	福岡市歴史文化研究報告書						
シリーズ番号	第188集						
編著者名	大庭紀子・池田真麻・松原有輔子						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-0021福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL092-711-4667						
発行年月日	2013年3月22日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因
所蔵者名	所在地	田町村 道路番号					
てんとういのき	あくひらら						
だいわん	あわく						
ちゅう	よこでなまち						
寺山道勝	福岡市南区 寺山南町	40132	1101	33° 54' 44"	130° 44' 11"	20110411 ~ 20110509	270 記録保存調査
第8次調査							
比奈道勝	みのねどうかつ						
第10次調査	せうじ						
第8次調査	みのねどうかつ	40132	0324	33° 34' 50"	130° 25' 55"	20030626 ~ 20030702	115.6 記録保存調査
第10次調査	せうじ						
比奈道勝	みのねどうかつ						
第8次調査	せうじ						
第10次調査	せうじ	40132	0105	33° 32' 5"	130° 26' 17"	20070801 ~ 20070811	69.2 記録保存調査
所蔵者名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	若記事項		
寺山道勝	生糞	弥生時代 中・晩	溝・柱跡不明遺構	弥生土器・灰陶器 縦入鉢陶器・石器品			
第8次調査							
比奈道勝	生糞	弥生時代・古墳時代	柱穴・土坑	弥生土器・灰陶器・土葬 器			
第8次調査							
比奈道勝	集落	古墳時代 古代	溝・土坑・柱穴	弥生土器・土葬器・ 灰陶器・石器			
第10次調査							
要約	<p>【 今島道勝第3次調査】</p> <p>調査地は、①今島道勝の集落部分に位置する。遺構面は、灰色粘土を含むいわゆる人女性土上の埋設後戸で、標高は13.8mばかり、丘陵部を構成する3m近く、白水川を挟んで隣接する笠置山と並んである。調査地は、②笠置山の北側斜面に位置する。五代前の新作墓群のほかに、12世紀に大波田式の水路(DO1)および木造・土塁式の古墳群がある。後者のうち、後良時代中尾原古墳(現SD01)は、五代の新作墓群SSX12などがある。また、12世紀に笠置山第1次・第2次大規模な集落をまとめる、SD01・SX12とともに生糞・灰陶器を検出され、後良時代の水田地に自立水門の水を供給する複数を兼ねていたと推測される。</p> <p>【 比奈道勝第8次調査】</p> <p>遺構は、主として柱穴などの基礎部分に位置し、複数箇所に、洗浄面標高4.3mをはかる。遺構面は、埴生土・埴生土上の土質で検出した。長崎江戸町では遺構面上に形成の泥化土が確認し、盆地部を形成しており、後良時代中期から古墳時代の遺物を含む。後者の泥化土がかなり込んでおり、調査地付近に想定された後良時の古道の痕跡は本調査では確認できなかった。</p> <p>【 佐永良道勝第10次調査】</p> <p>遺構が立ち並ぶ比較的支持の弱い、古墳時代中期・後良時代の重なり合った溝を多数検出。</p>						



福岡市埋蔵文化財調査報告書第1188集

中南部 11

- 寺島遺跡第3次・比恵遺跡群第86次・弥永原遺跡第10次調査の報告 -

2013(平成25年)3月22日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 有限会社プリコム
福岡市博多区冷泉町1-20
(092) 282-5321